

Title	有識者会議とImagined Publics : 日英の政策議論の比較から
Author(s)	久保田, 唯史
Citation	年次学術大会講演要旨集, 37: 331-333
Issue Date	2022-10-29
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10119/18573">http://hdl.handle.net/10119/18573</a>
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

## 1 D 2 4

# 有識者会議と Imagined Publics ー 日英の政策議論の比較から

○久保田 唯史 (University College London)  
tadafumi.kubota.18@ucl.ac.uk

### 1. 背景

科学技術への市民参画 (Public Engagement in Science and Technology: PEST) の重要性が叫ばれるようになって久しく (Stilgoe et al., 2014)、科学技術政策の領域においても、政策科学分野における熟議型民主主義 (deliberative democracy) に関する研究・議論の発展と相まって (Fischer, 2009; Goodin & Spiekermann, 2018)、特に西欧において市民参画を導入しようとする取組が行われている (Goodin and Dryzek 2006; Macnaghten and Chilvers 2014; Pieczka and Escobar 2013) (Brown 2008; Jones and Irwin 2010; Stilgoe et al. 2006)。科学技術社会論 (STS) は、市民がもたらす「Lay expertise」が専門家による知識と同等に政策立案に寄与する可能性を指摘し、この動きに対する理論的基盤を提供してきた (Jasanoff, 2003; Wynne, 2003)。

一方で、科学技術政策立案の実践において PEST が成功した事例は少なく、lay expertise が十分に政策に反映されているとは言い難い状況が続いている (Goodin & Dryzek, 2006; Hansen & Allansdottir, 2011)。これに対して、STS 分野の研究者らは、自然科学の知識を絶対視し、他の知的体系の領域に支配的に拡張してしまう「科学主義 (Scientism)」と、これによる市民に限らず他の知的生産を軽視する傾向を指摘し、これらはテクノクラシー的な政策立案体制における、政府の科学的助言者や政府そのものに対する批判として文化横断的に用いられてきた (Blue, 2018; Welsh & Wynne, 2013)。

しかし、筆者はこれら科学技術分野の有識者あるいは科学技術政策立案者たる政府に対する批判が、2種類の混同を問題として抱えていると考える。一つには、「科学」と「社会」という二元論的な論調の中で、批判の対象として政策立案者 (政治家もしくは行政官) を科学者と一纏めにして批判の対象とすることで、議論が過度に単純化されてしまっている点 (Bora, 2010)、もう一つには、科学主義自体が文化的・歴史的・社会的文脈を考慮せず、共通概念のように用いられてしまっているという点である。

このような文化的文脈の重要性に着目した先行研究として、Jasanoff による「civic epistemology」が挙げられる (Jasanoff, 2005)。彼女は、科学技術に関する社会的な選択 (当該科学技術に対する規制の導入等) を決定する際の基礎として、科学知識がどのように社会において妥当であると受け入れられるかを表す概念として civic epistemology を定義し、そうした社会受容のあり方が、それぞれの社会における政治文化等に依存していることを指摘している。一方、政策科学の研究においては、Johnson が東アジア圏における「Developmental States」について分析する中で、日本をはじめとした東アジアの民主主義のあり方が西洋とは異なることを見出し (Johnson, 1999)、特に、民意によって直接的に信任された立場にない行政官が政策立案の判断をすることについては、西洋の民主主義が所与とするものとは異なる正統性に依拠することを指摘している。

これを踏まえれば、civic epistemology の比較において共通的に置かれる「社会的選択の方策」の前提すらにも文化圏ごとの差異があることが示唆され、一見して類似する civic epistemology を持つそれぞれの文化圏において共通して見ることの出来る lay expertise の軽視に対して、同一的に「科学主義」と断じるのではなく、背景構造、特に「社会的選択の方策」において異なる文化的差異が寄与する可能性を考慮することの重要性が仮説として浮かび上がる。

そこで筆者は、この「社会的選択の方策」、具体的には政策判断がどのように正統性を得ることができるか、またこれに関わるアクターとしての行政官がどのような立ち位置にあるかについての違いに注視しながら、科学技術政策立案における市民の位置づけについての比較を試みた。

### 2. 分析的枠組

社会がどのようにして政策判断に正統性を見出すかについては、直接的にそれを観察することは難しく、また市民や行政官の位置付けも、客観的指標によって評価することは難しい。そこで筆者は、社会

学分野の研究におけるイマジナリー概念 (Taylor, 2002, 2004)を分析的枠組みに用いることとした。先行研究において社会の態様を見出す有用なツールとして用いられていること (例えば Jasanoff et al., 2009; McNeil et al., 2017 など) に着目し、具体的には科学技術政策における市民に対するイマジナリーを「Imagined Publics」と定め、科学技術政策における議論の比較事例研究において Imagined Publicsを見出すことで、本研究の命題に答えることを目指した。

分析対象としては、特に行政官の政策立案への寄与度が共に高い英国及び日本における、受精卵や配偶子に対する遺伝的介入 (英国：ミトコンドリア移植、日本：ゲノム編集) についての規制枠組みの検討に関する議論を扱うこととし、議事録、政策文書の質的テキスト解析や議論に関与した者へのインタビュー調査を行った。

### 3. 結果

日英の比較事例研究を通じ、英国のミトコンドリア移植技術の法制化可否についての議論における Imagined Publics として「科学が助けるべき、声を聞くべき者」と、「政府の方針への評価者」と二分した色相が見られ、一方で日本の受精卵へのゲノム編集に対する議論においては、「政策から遠い、科学技術の恩恵の享受者」といった性質が見出された。

前者は、患者団体を代表に、当該技術の第一人者らや政府と一緒に法制度化で技術利用を認める方向に活動する者、後者はより漠然と、技術やそれに対する政策に対し、政策検討のコアからは若干離れたところで評価する形で関与する者から想起されるが、Public Dialogue 活動や検討会議への招聘といった行政的手続きにおける明確な区別によって具現化されていた。一方で、政策議論に積極的に関与することは、この行政的手続きにおいて担保され、関係者間で「公平な手続き」としての正統性が確保されたものであった。

後者は、有識者会議において、必ずしも専門的知識を持たない委員から発せられた「政策議論に関与するには難しい者」という認識の旨の発言や、有識者会議の報告に具体的に書かれるも、シンポジウム等による啓発的な取組に当初限定されていた市民参画の形態において顕著であり、またこの背景には、研究者コミュニティと有識者会議 (と事務局を務める行政) との間に一時期生じた溝や、一時期において必ずしも専門的知識を持たない行政官が会議の議論を先導していった様子等に見られるように、行政側・研究者側で根底に共有された「判断はお国が責任を持って行うべき」といった developmental states 的正統化構造と同調的であった。本事例で見られる市民の立ち位置が政策検討のコアから遠くに位置付けられている状態は、科学主義や欠如モデルに基づいた科学技術政策立案への参画資格の考えに依って政策検討の場から市民が遠ざけられる様態とは、本質的な差異が見られることが示唆された。

### 4. 考察

本報告は、研究途上でのものであり、結論としては未熟な域を出ない。他方で、Imagined Publics の分析からは、英国では行政的手続きに依って結論の正統性を担保する考え方、日本では判断者の立場や役割が結論に正統性を与える考え方というように、政策自体の正統性を判断する際の方向性の差異が透けて見え、それらが翻って市民の政策検討の場における領分を異なる方法で絞ってしまう可能性が示唆された。これは、より効果的な市民参画を促す手段を検討する上で、考慮すべき重要な観点を提供することが期待される。

### 参考文献

- Blue, G. (2018). Scientism: A problem at the heart of formal public engagement with climate change. *Acme*, 17(2), 544–560.
- Bora, A. (2010). Technoscientific normativity and the ‘iron cage’ of law. *Science Technology and Human Values*, 35(1), 3–28.
- Fischer, F. (2009). Citizen Participation and Deliberative Governance: The Problems of Knowledge and Complexity. In *Democracy and Expertise: Reorienting Policy Inquiry* (pp. 48–76).
- Goodin, R. E., & Dryzek, J. S. (2006). Deliberative impacts: The macro-political uptake of mini-

- publics. In *Politics and Society* (Vol. 34, Issue 2, pp. 219–244).
- Goodin, R. E., & Spiekermann, K. (2018). An epistemic theory of democracy. In *An Epistemic Theory of Democracy* (pp. 1–442). Oxford University Press.
- Hansen, J., & Allansdottir, A. (2011). Assessing the impacts of citizen participation in science governance: Exploring new roads in comparative analysis. *Science and Public Policy*, 38(8), 609–617.
- Jasanoff, S. (2003). Breaking the Waves in Science Studies: Comment on H.M. Collins and Robert Evans, 'The Third Wave of Science Studies'. *Social Studies of Science*, 33(3), 389–400.
- Jasanoff, S. (2005). 10. Civic Epistemology. In *Designs on Nature: Science and Democracy in Europe and the United States* (pp. 247–271). Princeton University Press.
- Jasanoff, S., Kim, S., & Sperling. (2009). *Sociotechnical Imaginaries and Science and Technology Policy: A cross-national comparison* (Issue September 2007).
- Johnson, C. (1999). The developmental state: Odyssey of a concept. In M. Woo-Cumings (Ed.), *The developmental state* (pp. 32–60). Cornell University Press.
- Macnaghten, P., & Chilvers, J. (2014). The future of science governance: Publics, policies, practices. *Environment and Planning C: Government and Policy*, 32(3), 530–548.
- McNeil, M., Arribas-Ayllon, M., Haran, J., Mackenzie, A., & Tutton, R. (2017). Conceptualizing Imaginaries of Science, Technology, and Society. *The Handbook of Science and Technology Studies*, 436–463.
- Pieczka, M., & Escobar, O. (2013). Dialogue and science: Innovation in policy-making and the discourse of public engagement in the UK. *Science and Public Policy*, 40(1), 113–126.
- Stilgoe, J., Lock, S. J., & Wilsdon, J. (2014). Why should we promote public engagement with science? *Public Understanding of Science*, 23(1), 4–15.
- Taylor, C. (2002). Modern Social Imaginaries. *Public Culture*, 14(1), 91–124.
- Taylor, C. (2004). Agency and Objectification. In *Modern Social Imaginaries* (pp. 163–173). Duke University Press.
- Welsh, I., & Wynne, B. (2013). Science, Scientism and Imaginaries of Publics in the UK: Passive Objects, Incipient Threats. *Science as Culture*, 22(4), 540–566.
- Wynne, B. (2003). Seasick on the Third Wave? Subverting the Hegemony of Propositionalism: Response to Collins & Evans (2002). *Social Studies of Science* 33/3(June, 33(3), 401–417.